

政治風刺画家トマス・ナストの ライフヒストリー

The Life of Political Cartoonist, Thomas Nast

貴堂嘉之
KIDO Yoshiyuki

はじめに——風刺画とは何か

2015年1月7日、フランスを代表する風刺新聞のひとつ「シャルリー・エブド」の編集部がイスラム過激派に襲撃され、風刺画担当者ら10名と警察官2名が死亡する痛ましい事件が起きた。きっかけは、同誌が2000年以降、たびたび掲載してきたイスラム教の預言者ムハンマドの風刺画であった。事件の4日後の日曜日に開催されたフランス各地の追悼デモには合計で370万人の大群衆が集まり、彼らの多くは「ぼくらはシャルリー」のカードを掲げ、「テロリズム反対、表現の自由を守れ」が合い言葉となった。だが、この新聞に描かれた風刺画は、本当に風刺画の神髄たる批判精神、反権力に貫かれたものであったのだろうか。単にこの事件が、「表現の自由」という西欧のリベラルな政治文化の名の下で（風刺画の表現内容を問題とせず）画家達を守り続け、「ムスリム＝テロリスト」の差別表象だけをメディアが再生産し、フランスのみならず各国にイスラム嫌悪をかき立てることで結果的に終わるのであれ



図版1 ナスト自画像より

“No rest for the wicked-sentenced
to more hard labor” *Harper's Weekly*,
December 2, 1876.

ば、それはあらためて風刺画とは何かという根本的な問いへと私たちに誘うことになる。

そもそも、風刺画はいかにして生まれ、いかなる役割を担ってきたメディアなのか？デモ参加者の中にも「風刺はフランスの伝統だ」との声が多く聞かれ、近代カリカチュアの父、オノレ・ドーミエ（1808～1879）以来の連綿たる系譜がフランス国民の記憶の中では喚起されていた。フランス革命と共和主義の激動と混乱の中、国王や政治家を風刺して、ドーミエの政治風刺は新聞という近代メディアの登場とも相まって一世を風靡した。一例を挙げれば、ドーミエの代表作に国王ルイ・フィリップの7月王政を批判した「ガルガンチュア」（ラブレの小説に登場する大食漢）がある。間抜けな洋梨の頭のかたちをした国王が、庶民から税金を取り立てて私腹を肥やす一方、国王のお尻のあたりには紳士達が群がり、勲章や任官状、特権を奪い合っている様子が描かれ、当時の政治腐敗を批判している。つまり、近代風刺画は誕生時より、革命の時代にあって、つねに権力者、強者に立ち向かう反権力の精神を持ち、新聞を（文字で）読めない階層にまで、誰にでもわかるメッセージ性の強い絵を通して、新しい政治理念、社会のあるべき姿を伝え表現するメディアとして機能を果たしてきた。

その点、「シャルリー・エブド」もまた、1968年のパリ5月革命を背景に誕生した週刊新聞である。当初は、フランスの大統領や政治家、ローマ法王など政界、宗教界の権威を恐れず毒のペンを走らせ、そのユーモアは反権力の精神に貫かれていたとみてよいだろう。しかし、21世紀に入り、インターネットが普及し新聞の発行部数が落ち込む中、9.11同時多発テロ以降のグローバルな反イスラム感情に便乗し、発行部数を増やすため、決して反権力とは言えぬ差別的風刺を、「売れるネタ」として頻出させたのは編集方針として正しかったのか。市井のイスラム教徒は強者ではなく、紛れもない弱者であり、この編集方針への疑念は、イスラム系住民が人口の一割を占めるフランス社会の多様性を考えれば深まるばかりである。また事件直後の刊行号（2015年1月14日号、「すべては赦される」）についていえば、急遽5カ国語での刊行となったのだが、世界中のイスラム教徒の心情にどれだけの配慮があったのだろうか。風刺画のわかりやすさは両刃の剣であり、19世紀に

あっては一国の閉じたメディア空間で識字の壁、階級の壁を越え大きな政治の力を発揮したが、21世紀にはそれはネットを通じて簡単に国境を越え、グローバルな空間に拡散してしまう。メッセージはシンプルでも常にその読みは多義的な含意があり、共感を呼ぶこともあれば、異なる文化、宗教のコンテキストでは憎悪の感情を喚起してしまうこともある。その意味で、編集者がどれほどこの21世紀的状况を理解し、そこで課されている「表現の限界」、多様性への配慮という重い課題に真摯に向き合っていたのか、残された課題は大きい。

さて、前置きが長くなってしまったが、本稿では、昨年10月の「アメリカの社会とポピュラーカルチャー」研究会での報告をもとに、アメリカを代表する政治風刺画家トマス・ナスト（Thomas Nast 1840～1902）が描いた風刺画の世界を分析する。19世紀フランス社会にオノレ・ドーミエがいたように、南北戦争とその後の再建政治の時代を中心にした19世紀アメリカ社会をトマス・ナスト抜きには語ることはできない。彼は、今ではクリスマスに欠くことのできない、あの太ったサンタクロースをアメリカ社会に定着させた人物であり、アンクル・サムやミス・コロンビア、共和党の象や民主党のロバのロゴ、タマニー・タイガーや通貨インフレの縫いぐるみ赤ちゃん（Rag Baby）など彼が作りだし、あるいは、彼が使うことで有名になった政治表象は数知れない。本稿では、政界でのプレジデント・メーカー（彼がキャンペーンで支援した大統領は悉く当選した）としての隠れた顔にも焦点を当てながら、これまでほとんど扱われることのなかった、ナストのライフヒストリーを取りあげてみたい。

でもなぜ、美術史や図像研究の専門家でない私が風刺画家ナストを取りあげるのか、この点については説明が必要であろう。私が拙著『アメリカ合衆国と中国人移民——歴史のなかの「移民国家」アメリカ』（名古屋大学出版会、2012年）を刊行するにあたり、南北戦争・再建期の激動の政治史、社会史を描くにあたって、連邦議会議事録などの公刊文書などには現れない、新しい社会のビジョン、黒人奴隷が解放された後の社会展望、南北間で渦巻く戦後の怨嗟など、当時の生の社会の息づかいを痛覚できる史料を探すなかで、出会った史料の一つがナストの風刺画であった。戦後の南部再建を主導



図版2 “Uncle Sam’s Thanksgiving Dinner,” *Harper’s Weekly*, November 20, 1869. 図版3 “The Chinese Question,” *Harper’s Weekly*, February 18, 1871.

する共和党急進派の国家構想をもっともわかりやすく視覚化し（図版2）、北部の民衆に伝える役割を果たしたのが『ハーパーズ・ウィークリー』紙で風刺画家として活躍したナストであった。拙著で中心的な論点となった「中国人問題」についても、奴隷解放後のアメリカ社会で、市民とは誰かが再定義される連邦政治においてそれは解放民の扱いをめぐる黒人問題以上に、当時の連邦議会で大きな争点になっていくが、この「中国人問題」についてもナストは全部で30枚もの風刺画を描いていた。他の画家たちが、排斥の対象として中国人労働者を醜い劣等人種、招かれざる移民労働者として黒人化して描いたのに対して、ナストは彼らをアメリカの国民共同体の家族の一員として描き、擁護し続けた。

「アंकル・サム家の感謝祭の晩餐」はナストが描いた風刺画の中でも、最も有名な絵の一つだが、このなかでも共和党が奴隷解放を達成した政党として人種融和を求め、黒人ばかりでなく、先住民や中国人、東欧系の人々まで、遍く国民として、家族として、アंकル・サムが感謝祭の晩餐に招待する、そうした姿を新生国家の理想図として描いた。右隣の絵（図版3）でも、アイルランド系とおぼしき、猿顔の暴徒から逃げまどう中国人を、ミス・コロンビアが庇い、守護する役割を担っている¹。こうした絵を描いたナストとは一体何者なのだろうと、自分の移民研究のテーマとは別に、この風刺画

家の人生そのものにいつしか強い関心を抱くようになり、彼のライフヒストリーを探ってみようと思ったのが本研究の出発点にあった動機である。

さらにいえば、歴史研究の史料論、方法論において、いまだ根強い公刊文書至上主義、文字史料と視覚史料との間に貴賤関係をみる歴史研究の現状に常日頃、疑問を持っており、どうにかして歴史学の史料として視覚史料、とりわけ風刺画を位置づけたいという目論みもある。ゆえに、トマス・ナスト研究を開始するにあたり、私が最初に行った作業は、ナストの主戦場となった『ハーパーズ・ウィークリー』（以後 HW と略記する）について、本誌が 1857 年に刊行されてから、ナストが亡くなる 1902 年までの総頁数 42,880 枚に掲載された全風刺画を調べ上げ、その新聞掲載の風刺画の大きさを表紙掲載の大風刺画を F (Front Page)、見開き 2 ページの大風刺画を D (Double)、1 ページの大風刺画を O (One)、漫画サイズの小風刺画を C (Comic) と 4 つに分類シカウントすることだった。これにより美術史家が画家研究をするように、風刺画家その人、およびその作品を論じることが可能になると考えたからである。そのデータ分類の年度別まとめが次頁の表 1 である。19 世紀アメリカを代表する風刺画家にも関わらず、全作品リストはこれまで作成されておらず、唯一、ナストの未亡人サラがナストの死後、1885 年までの作品を整理した未刊行の資料がニューヨーク公立図書館にあるのみである。このリストと照合する作業をしつつ、サラ氏のカバーする 1885 年までの範囲で新たに 31 枚の作品を見つけ、対象外であった 1886 年以降に 30 枚の作品を見つけた結果、最終的に 2190 作品が HW に掲載された作品であると結論づけた。最初の作品が掲載されたのが 1859 年、ナストが 19 歳のときでその後、南北戦争中の愛国的挿絵で名を馳せて以降、1870 年以降は毎年百枚を越す風刺画を 80 年代中葉まで描き続けた。新聞の表紙を飾る回数も 30 回を越えた年が多く、新聞の発行が年間 52 週として約 52 回だとすると、隔週以上のペースでナストの風刺画が一面トップに掲載されていたことになり、この時期が彼の風刺画家としての黄金期だったことがわかる。この資料整理をもとに、彼の画家デビューから黄金期、晩年へと彼のライフヒストリーを丹念に追い、新しい視覚史料研究を試みてみたい。

最後に史料について述べておくと、ライフヒストリーの史資料としては、

年	総頁数	風刺画数	内訳				年	総頁数	風刺画数	内訳			
			F	D	O	C				F	D	O	C
1859	844	1	0	0	1	0	1878	1060	132	35	10	35	52
1860	832	0	0	0	0	0	1879	1012	140	38	5	39	58
1861	832	0	0	0	0	0	1880	836	121	33	4	30	54
1862	832	10	2	4	4	0	1881	904	114	32	5	11	66
1863	832	31	2	13	15	1	1882	844	142	13	1	35	93
1864	848	19	1	12	5	1	1883	848	15	0	0	3	12
1865	832	11	0	9	2	0	1884	870	133	28	4	22	79
1866	832	41	1	6	8	26	1885	864	154	10	5	23	116
1867	832	18	1	3	13	1	1886	856	189	18	1	25	145
1868	832	40	6	1	9	24	1887	968	5	0	0	0	5
1869	832	27	1	0	16	10	1888	1016	1	0	0	0	1
1870	872	43	1	1	19	22	1889	1048	0	0	0	0	0
1871	1240	101	7	4	41	49	1890	1016	0	0	0	0	0
1872	1040	159	32	6	55	66	1891	1056	0	0	0	0	0
1873	1176	44	7	5	12	20	1892	1272	0	0	0	0	0
1874	1084	94	28	5	20	41	1893	1264	0	0	0	0	0
1875	1056	131	27	7	39	58	1894	1252	0	0	0	0	0
1876	1068	154	34	15	39	66	1895	1254	15	0	0	2	13
1877	1040	96	26	7	28	35	1896	1288	9	0	0	1	8

表1 ナストの風刺画数(年別、大きさ別)

まず1904年にアルバート・ビッグロー・ペインが刊行した伝記、*Thomas Nast: His Period and His Pictures* が重要である²。これは19世紀末にマンハッタンのクラブでナストと知り合ったペインが、ナストから直接、聞き取りし、独自に資料を集めた上で、ライフストーリーとしてまとめたもので、ナストが亡くなった2年後に刊行された。また、ナストの個人ペーパーには、ナストの家があったニュージャージー州モリスタウンの公立図書館所蔵の史料、ハンチントン図書館所蔵のThomas Nast Papers、ヘイズ大統領図書館所蔵の日記(Thomas Nast Diary)などがある。

1. 南北戦争・再建期の出版文化と政治

では、ナストのライフストーリーを辿る前に、彼が活躍した時代の出版文化と政治について簡単に抑えておきたい。アメリカに限らず、イギリス

でもフランスでも、19世紀のある時期、風刺画が新聞・雑誌の花形となった。フランスではオノレ・ドーミエ、J.J. グランヴィルが登場し、『カリカチュール』や『シャリヴァリ』といったメディアで風刺の政治文化が誕生した。イギリスでも1840年代には『パンチ』や『ロンドン・イラストレイティッド・ニュース』（以後、LIN）が登場し、このイギリスでの絵入り新聞の成功を受けて、アメリカでのブームが始まった。まず『グリーソン』（Gleason's Pictorial Drawing-Room Companion）と『イラストレイティッド・アメリカン・ニュース』が1851年に創刊され、これに続いて『レスリー』（Frank Leslies'）が1855年に発刊、発行部数は1860年に16万部にまで伸びた。続いてHWが1857年に刊行され、やはり南北戦争中に12万部、戦後は20万部弱の発行部数となり人気紙となった。これに続いて、『バック』（Puck）や『ワズプ』（WASP）が1876年に発刊され、『ジャッジ』（Judge）が1881年からと続々と絵入りジャーナリズムが開花した³。

なぜ、19世紀が「カリカチュアの世紀」となったのか？それにはいくつか理由がある。まず技術面では、この時代になって初めて同一の文書を大量生産、大量消費することが可能になる「第二の出版革命」とでもいうべき、技術革新が起こったことが挙げられる。初等教育の拡充により識字率が向上し読者の裾野が大きく広がったのと同時に、産業革命期の技術革新により紙を大量に生産し、素早く印刷し、送り届けるインフラの整備が急速に進んだ。印刷の機械化はイギリス、ドイツで先行し、蒸気を利用した自動印刷機の発明により、1814年には1時間に2万2千枚を刷ることが可能になり、自動印刷機は欧米へと急速に広がった⁴。図像についても、それまでの銅版画にかわり、ドイツで石版画（リトグラフ）が発明されたことがカリカチュアの世紀を準備することになった。石版画は紙に画家がデッサンするように描け、特別な技術も必要なかったため、19世紀の書物、新聞の挿絵には石版画が広く利用されることとなった。

これに加えて、もう一つ重要なのは、封建時代には印刷物の恩恵は王室や貴族など限られたサークルの内部に閉じていたものが、革命後の近代市民社会の誕生により、新しい公共的な語りの形式として「ニュース」が誕生し、「言論の自由」を保証された政治空間のなかで、出版物・新聞の流通が始

まったことが大きい。ベネディクト・アンダーソンが指摘する、出版資本主義によるナショナリズムの形成が大きな起爆剤となったのである⁵。識字率が低くても、風刺画には普遍言語としての側面があり、小難しい政治言語抜きに、風刺画は政治の本質を伝えることができた。この機能により、各国における「国民」の創造、国民化のための伝統の創造に寄与するものとして絵入り新聞が積極的に利用されることとなった。しかも、そのブームが20世紀転換期を境に途絶えるのは、その後は風刺画に代わり、報道の主役が写真へと大きくシフトすることが影響している。つまり、報道写真登場前という限定つきの近代メディア萌芽期こそが、カリカチュアの世紀たる19世紀の出版文化の特徴なのである。

実際、アメリカでも新聞ビジネスは南北戦争を契機に大きく発展した。独立後の18世紀末以降、ニューイングランドではもちろん新聞は刊行されていたが、発行部数は限定的であった。むしろ、奴隷制をめぐる対立で国を二分する政治論議が過熱する中、南北戦争直前の50年代からアメリカでは多くの新聞社が設立されはじめた。その数は南北あわせて2500種類にのぼり、そのうち北部には日刊紙が283紙、南部には80紙、ニューヨークだけで17紙あったとされる。この戦争を契機にアメリカで定着した報道の特徴としては、第一に特派員や「ボヘミアン・ブリガード」と呼ばれた従軍記者による報道があり、また1848年にニューヨークの新聞社が協定を結んで作ったAP通信を通じて、ニュースの電信配送が始まり、通信社から情報を買って記事編集する方式がこのとき始まった。各社は、南北戦争が始まると戦場に従軍記者を派遣して報道は過熱していったが、なかでもHWは独自取材によりビジュアルな戦争イメージを読者に伝え、戦争報道では随一のメディアとなった。当時、すでにマシュー・ブレイディのように写真による戦争報道も一部あったが、多くの新聞は画家達を戦場に送り込み、ビジュアルなイメージを読者に伝えるべく務めた。彼らは戦場スケッチ以外にも、南軍の残虐行為や黒人奴隷の悲惨な状況、北軍の名誉の戦死者の姿などを描き、遠く離れた家庭に彼らがもたらすスケッチや風刺画の情報が戦場の「事実」としてインパクトを与えることとなった。こうして読者が同時に同じ情報を消費する儀式が誕生したことが、アメリカの国民共同体としての国民意識創出の

跳躍台となっていった⁶。

また、この時期の報道の特徴として触れておかねばならないのは、現在の報道機関が目指す客観的「事実」に基づく報道、公平・中立性の原則は完全に無視され、極端に党派的な偏向報道がなされていた点である。ニューヨークの新聞雑誌を例にとれば、大統領支持の新聞はトリビューン、ヘラルド、タイムズの3紙のみで、他の9紙は奴隷制擁護、5紙は明らかな南部同情派であった。政党別でも、共和党急進派寄りのトリビューン、HW（1863年以降）、共和党穏健派寄りのタイムズ、独立派のヘラルド、親南部のニッカーボッカーなど、党派色の強い政治メディアとして各紙が特色ある紙面を作った。こうした政治的メディアに対し、陸軍長官スタントンは1862年に新聞メディアの検閲を開始すると宣言したが、それまで前例がなかったこともあり、実質的には検閲は実施されず、報道の自由は守られたようである。また、大統領・主要閣僚など政治家がプレス・インタビューを受ける報道慣習が生まれ、会見記事が一般化したのもこの時期である。ここから政治家と報道関係者との親密な関係が世論を動かす重要な意味を持つようになる点も付言しておきたい。また、当時の新聞・出版業は、ナスト自身がドイツからの移民であったように、印刷業者、画家を含めドイツ系が多い職場であったが、それは印刷機やリトグラフの技術革新でドイツが優位に立っていたことが関係していると思われる⁷。

2. トマス・ナストのライフストーリー

では、ここからトマス・ナストの風刺画家としての波瀾万丈の人生をみていくことにしよう。

(1) 幼少期——誕生、アメリカ移民、ファイブ・ポイント（1840～1860）

ナストは、1840年9月27日、ドイツのバイエルン王国、ランダウにて、父ヨーゼフ・ナスト、母アポロニア・アブリスのもとに生まれた。父はバイエルン軍の軍楽隊に勤務（トロンボーン担当）し、ナストには兄が2人（早くして亡くなる）、姉が1人いたようだ。政治的混乱を避け、1848年革命を

前に、一家はバイエルンを去ることを決意し、母とナスト、姉の3人は、父より一足早く1846年にパリ経由でニューヨークに渡り、マンハッタンのグリニッチ通りに居を構え、1850年に父も仕事を辞め渡米、家族に合流した⁸。ドイツ系移民は、この革命期に政治的混乱を避けて渡米し、いわゆる48年組(Forty-Eighters)と呼ばれる大きな移民の波を形成したが、ナスト一家もこの大波にのってアメリカにやってきた。

6歳で渡米したナストは、はじめ、英語を話せなかったので小学校に馴染むことができず苦労した。しかし、ウィリアム通りに転居し、ドイツ系が多く通う学校に移ると勉学にも身が入るようになった。ナストの絵の才能は小学校時代から群を抜いており、その才能を開花させるべく、親も絵描きになることを勧め、美術学校(National Academy of Design)への入学が決まった。この学校は、ロンドンのロイヤル・アカデミーをモデルに設立された画家養成の専門学校で、ここでナストは絵描きとしての修行を積み、スケッチブックを持って美術館で名画の模写をするのが日課となった。学校以外にも、ドイツ系画家のセオドア・カウフマンに弟子入りし個人レッスンを受け、めきめき腕前を上げていった。ナストの風刺画がデッサン力で秀でているのは、この時代の修練の賜物である。こうして若くして画家としての将来を囑望されたナストは、わずか16歳で、最初の絵を『レスリー』に掲載し、父が亡くなったこともあり、すぐに週4ドルではあったがそこで働きながら絵の勉強を続けることとした⁹。この仕事に就いて以降、HWを1886年に辞めるまで、ナストはひたすら出版業で絵を描く仕事に従事することとなった。

ナストが海を渡った6歳から就職する16歳までの約10年間に、ナストはその後の風刺画のライトモチーフとなる、アメリカ的信条・価値観や政治的立場、様々な移民集団への偏見、接し方を身につけていった。移民受入の港近くに広がったダウントウンの雑踏が、これ以上ないナストの政治・社会教育の生きた教室となった。とりわけ、転居した先の家の近くには、ニューヨークの象徴的なスラム街であるファイブ・ポイントがあり、そこで都市の抱える貧困や犯罪、暴力、ウィリアム・トウィードを中心としたタマニー協会による都市支配の政治の生成・展開をすべて目の当たりにした。ナストの政治風刺の真骨頂ともいえるタマニー協会批判でそれを獐猛なタイガーとし



図版4 “Shadows of Forthcoming Events,” *Harper's Weekly*, January 22, 1870.
右中段にエンジン6のユニフォームのトウィードが描かれている。

て象徴的に描いたのは、幼少時に見たタマニーの原点である自警消防団エンジン6 (1846年～) の車の後部にタイガーがペイントされていたからである。トウィードはこの通称、「アメリカス」での活動を足がかりに、1852年に29歳の若さで市議員に当選、以後、タマニー協会のボスとしてニューヨークの消防士、警察官などの公職を独占、移民達の帰化手続きを行う地方行政にも影響力を持つなど、市政を牛耳り大きな権力を手に入れることになった¹⁰。

トウィードのみならず、ナストがアイルランド系移民コミュニティを敵視する立場も幼少期に身につけた。ファイブ・ポイントの住民の3分の2はアイルランド系であり、そこでのドイツ系は15%ほどでドイツ系といっても、ドイツ語を話す住民の半分はユダヤ系であった¹¹。ドイツ系コミュニティが1848年革命前後に急成長した以上に、同時期、アイルランドからはジャガイモ飢饉を契機に150万人の大量の移民が流入し、両コミュニティの敵対関係は激しさを増した。マンハッタンに流入したアイルランド系は、「白い



図版 5 “Church and State,”
Harper's Weekly, February
19, 1870.



図版 6 “The American River Ganges” Harper's Weekly,
September 30, 1871.

ニガー」と呼ばれ排外主義のターゲットとなり、最底辺の仕事黑人労働者と奪い合った。だが、民主党系政治団体タマニー協会が彼らの大量の票（政治的潜在力）を目当てに接近し、彼らへの仕事や住居を提供する見返りに、民主党への投票を約束させる仕組みができあがると、ニューヨークでは民主党、トウィード、アイリッシュが強く結びつき、タマニー協会中心の悪政の基盤ができあがった。

ドイツ系はアイリッシュと同じカトリック教徒が多く、当初は民主党支持者もいたが、ヨーロッパの自由主義の息吹を経験してきた 1848 年組の移民達の声がドイツ系コミュニティで大きくなると、奴隷制反対を掲げて 1854 年に結党した共和党への支持者が急増し、民主党離れがすすんだ。ナストの熱烈な共和党支持、奴隷制反対の揺るがぬ信念は、この幼少期からのものである。ナストが足繁く通ったビアホール (Pfaff's Beer celler) は、ニューヨークの革命的文化の中心であり、ドイツ系革命家らとの交流からナストは革命や自由主義の意義を学んだ。11 歳のナストは、父につれられ、ハンガリーの英雄コッシュートの訪米パレード (1851 年) に参加しており、ヨーロッパの民族主義、自由主義の思想が確実にナストに植え付けられていった。こうしてナストは、移民一世でありながら、アメリカの独立宣言や合衆国憲法に謳われた啓蒙主義的な政治理念に強く共感し、その意味ではアン

グロサクソンの文化にたちまち同化し、同時に、アイルランド系への排外主義を自明のものとして受け入れた。ナストの自伝に宗教に関する記述は少なく、ナスト一家がカトリックであったかは定かではない。だが、おそらくカトリック信仰を早い段階でやめたことが推測され、これによりアイルランド系への攻撃をローマ法王を登場させる反カトリック批判としてもたびたび登場させることになったと思われる。ただ、これをもってナストをアメリカの排外主義者と断じるのは早計に過ぎる。図版5のようにナストにとって、反カトリック・キャンペーンは、ヨーロッパ近代の革命の成果である「政教分離」原則を彼らが破ることへの警告であり、子どもたちを守るためにも（図版6）、アメリカでこの原則は自由主義の発展に不可欠なものとナストは信じて疑わなかったからだ。

(2) 転機——ヨーロッパ旅行と南北戦争（1860～1865）

ドイツ系を中心に知識人のたまり場となっていたパフのお店で、ずんぐり小太りの体型から「子ブタちゃん Little Piggy」の愛称で人気者になっていた絵描きナストは、著名な伝記作家ジェームス・パートン¹²と知り合い、その従姉妹、サラ・エドワーズと20歳の時に婚約、翌年1861年に結婚した¹³。共和党支持の有力者であるパートンと縁戚となり、パートンと親しかったHWの編集者、ジョージ・カーチスとの出会いが後のナストのHW入りの呼び水となった。

ナストは19歳のとき、最初の絵をHWに掲載するが、そのときはHWの専属ではなかった。16歳からレスリーで働き始めたナストは、絵を描くだけでなく、石版に彫る作業、取材法、印刷加工なども身につけ、新聞発行の一連の共同作業をすべて身につけた。サラとの婚約後、人生の次のステップへと進むべく転職を考え始めていたナストは、『ニューヨーク・イラストレイティッド・ニュース』（以後、NYIN）の依頼で、イギリスでのボクシング世界選手権の取材のため渡英した。ロンドンでは、また急なLINからの依頼で、イタリアのガリバルディの取材に向かい、赤シャツ隊に同行して転戦する日々を送った。ガリバルディはイタリア統一戦争の英雄であると同時に、ナストにとっては、コッシュート同様、1848年革命のスピリットを

体現する存在であり、このときの戦時取材が、南北戦争における自由や愛国をテーマとした取材活動に活かされていくことになった¹⁴。

翌1861年に戦争直前のアメリカに戻ったナストは、引き続きNYINの依頼で、リンカンのレセプション、大統領就任セレモニーの取材のためフィラデルフィアや首都ワシントンを訪れ、南北戦争勃発までの時々刻々を経験した。ナストが南北戦争の最中、HWのスタッフとなったのは開戦の翌年1862年の夏（22歳）である。すでにHWは画家としてウインスロー・ホームを戦場に派遣していたが、ナストもこれ以降、独自の視点から多くの風刺画を従軍画家として描き、終戦時には全米一有名な風刺画家となっていたのである¹⁵。

ナストが南北戦争中にHWで描いた絵は全部で60枚あるが、なぜ彼が一躍有名人になったのか。第一の理由は、もちろん中には、他紙と同じような当時の戦場描写の流儀にならった陳腐なスケッチ画もあるが、それとは一線を画す、国民の感情に直接訴える、ナストにしか描けない愛国的風刺画が多数生み出されたことにある。南北両軍あわせて62万人もの戦死者を出す未曾有の内戦となった戦争を描写するにあたり、ナストは星条旗を北軍（連邦軍）の英霊（黒人兵にも当初から注目している）と重ね、崇高なシンボルとして用い、この戦争、混沌を鎮める女神として、アメリカという国家を表象するミス・コロンビアという女神を効果的に用いた。コロンビアは、フランス共和制のシンボル、マリアンヌ図像と共通した意味で用いられ、カオスの統合のシンボル、権力性を帯びない女性表象、空白の記号となった。伝統的に州権が強く連邦権限が弱いアメリカで、国家という馴染みのない大きな権力を表現する上で重要だったのは、特定の人種や階級の利害を代弁することのない空白の記号性であり、まさにこの女神像によって、多くのアメリカ人にとっては抑圧的でしかなかった国家権力を、ナストは家族的共同体としての国民（国家）の守護者のイメージへと転換することに成功したのである¹⁶。

国家を家族的共同体として描く手法は、戦後の理想社会を提示した「アンクル・サム家の感謝祭の晩餐」でも用いられており、ナストの風刺画の柱となっている。この家族団欒のイメージを、戦後の南北和解と結びつけていたのがリンカン大統領であったのは決して偶然ではない。リンカンはゲティス

バーグ演説で、南北双方の戦死者を勇者として顕彰し、生者が「自由の新しい誕生」をもたらすべく未完の事業に献身することを期待した。この主旨のメッセージは、リンカン大統領が国内融和を図り国家としての団欒を取り戻すため、長らく忘れ去られていた「感謝祭」の祝祭を復活させ、11月最後の木曜日を戦中の1864年に連邦の祝祭日に定め、遠く離れた家族・親族が再会し絆を深め合うことを奨励したことにも現れている。この家族団欒の系譜に、もちろんナストの代表作となるクリスマスのサンタクロースの絵画群が位置づけられるのはいうまでもない。サンタクロースをメルヘンチックな民話の世界の話として非政治的の表象としてみるのは間違いである。事実、ナストが最初に描いたサンタは、1863年の元旦、奴隷解放宣言が出された2日後に北軍の駐屯地を訪れ慰問する場面なのだから。これ以降、ナストは30年以上、毎年クリスマスにはサンタクロースと子供達を登場させ、1890年にはクリスマス・イラストを集めた『トマス・ナストのクリスマス絵』を刊行した¹⁷。これが今日あの太った身なりのサンタクロースを作り上げたのである。ちなみに、クリスマスは7月4日の独立記念日とともに、ナストと親しいグラント大統領が署名して、再建期の1870年に連邦の祝日となった。これらはまさに、祝祭日の制定という「伝統の創造」により、南北分断の過去を克服し、家族共同体としての国民を再創造する政治的試みだったのである。



図版7 “Santa Claus in Camp.”
Harper's Weekly, January 3,
1863.



図版8 “Christmas Eve,” Harper's Weekly, January 3, 1863.
遠く離れた兵士と家族の心情を円形に縁取った複数の円内に描き込み、感情世界を描写するのはナストの得意な構図。



図版9 “Compromise with the South—
Dedicated to the Chicago Convention,”
Harper's Weekly, September 3, 1864.



図版10 “The Emancipation of the Negroes,
January 1863 – The Past and the Future”
Harper's Weekly, January 24, 1863.
これも円形の縁取りがされ、左右で奴隷制下の暗い
過去と解放後の明るい未来が対照的に描かれてい
る。ナストの未来予想図は常に楽観的な構図で、そ
れが人々に希望を与えることになった。

また、ナストが一躍有名となった二つ目の理由は、終戦間際の1864年9月に描かれた「南部との妥協」という一枚の風刺画による。「シカゴ綱領」（1864年10月15日）とともに、南部との安易な妥協に警鐘を鳴らし、連邦の理念を貫く必要性を説く風刺画が、共和党側からの依頼でキャンペーン用ポスターに採用され、数十万部のコピーが政治利用された。こうして開戦時には無名の従軍画家に過ぎなかったナストは、戦時中の愛国的な挿絵で国民を鼓舞したことが高く評価され、リンカンには「ナストはわれわれの最高の徴兵官であり、彼の象徴的な風刺画が熱狂的な愛国主義を呼び起こしてくれた」、グラントには「ナストこそが連邦を維持し、戦争を終結に導いた人物である」との惜しみない賛辞を受ける、有名画家となっていたのである¹⁸。

(3) 再建時代の共和党政治（1865～1873）

ナストは、戦争終結直後に長男が生まれたこともあり、子ども向け絵本の出版など、HWでの仕事以外に画家としての活動の幅を広げることを探っていたように見える。しかし、戦時中に一躍人気者となったナストをHWが手放すはずもなく、ナストはリンカン暗殺後の戦後再建期の共和党の対南部占領政策を国民にわかりやすく伝えるという重要な任を負う風刺画家として、その名声を高めていった。仕事場のあったニューヨークの戦後は成長め

ざましく、セントラル・パークやメトロポリタン美術館の完成など、ローカルなニュースに事欠かなかったにも関わらず、後述するタマニー協会批判のキャンペーン以外は、ナストはもっぱら全国ニュースとなるような首都ワシントンの政治の世界、南北戦争の公的記憶をめぐる問題、愛国文化に焦点を当てた。

共和党の戦後政治は、リンカン大統領暗殺後、副大統領から昇格した南部テネシー出身の無名の政治家、ジョンソン大統領による南部有和的な反動政治で幕を開けた。議会ではジョンソンが共和党議員と対立を繰り返し、史上初の大統領弾劾裁判まで引き起こされた。こうした共和党内の党派間のゴタゴタの中、再建期連邦議会の主導権を握ったのが共和党急進派の議員たちであった。HWの編集長カーチスは、政権を担う共和党有力者を支持する立場を長年守ったが、彼が最も尊敬していたのは急進派リーダー、チャールズ・サムナーであった。ナストは、ジョンソンをシェークスピアの悲劇『オセロ』を舞台にした風刺で批判するなど、カーチスとも歩調を合わせて仕事をスタートさせたが、彼らは共和党内の政治家批判の風刺画が出るたびに衝突を繰り返した。最初の対立がおきたのは、ナストがサムナーを嘲笑する絵を描いたときだが、人気作家ナストの立場は強く、基本的には自分の主義主張を盛り込み、風刺画を描くことが許される特権的立場にあった。それもすべては、創業者のフレッチャー・ハーパーが常にナストを守り続けたからである。ハーパー社は、全米の出版文化の中心地であるニューヨークでも最大手の出版社の一つで、創業者は4人の男兄弟で、末っ子のフレッチャーがHWを含む雑誌担当の社長であった。HWの販路拡大のためにもナストを独占したいと考えたフレッチャーは、ナストが他誌に引き抜かれなないように、1873年にはわざわざ異例の終身専属契約を結び、固定給に加えて風刺画一枚ごとに追加で給金を支払う破格の契約までした¹⁹。



図版 11 “Andrew Johnson’s Reconstruction,” *Harper’s Weekly*, September 1, 1866. 裏切り者のイアゴ役のジョンソン大統領とオセロ役の黒人退役軍人・負傷兵

ナストの名声は、盟友グラントの応援要請に応じての大統領選挙キャンペーンでの活躍、選挙での圧倒的勝利でさらに高まることになった。戦時中にナストは「グラントに感謝」(1864年2月6日HW)で、女神コロンビアが軍服姿の凛々しいグラント將軍の胸に勲章をつける挿絵を描いたが、ナストにとってグラントは国家分裂の危機を救った英雄であり、その軍事的貢献への尊敬の念は生涯変わらなかった。1872年のグラントが再選を狙う選挙でもキャンペーンを打ち勝利に導いたことから、ナストはいつしかプレジデント・メーカーとまで称されるようになった。

内戦の英雄から平和の英雄へと転身を図るグラントを担ぐ選挙で用いられたのは、北軍の名誉の戦死者を象徴する「血染めのシャツを振る」選挙キャンペーンであった。急進的な黒人政策をめぐり共和党内が必ずしも一枚岩とはいえない状況下で、党員をまとめるには、民主党員と旧南部退役軍人を貶め、北軍の名誉の戦死者のレトリックを用いる論法であったことは想像に難くない。戦後社会では、復員軍人が米国陸軍軍人会を結成、大きな政治的存在となっており、共和党政権の支持基盤の核をなしていた。ナストは、黒人負傷兵など北軍兵士をそれまでも愛国のシンボルとして多用しており、選挙広報には最適の人物であった。68年選挙では民主党側が「再建諸法反対、



図版 12 “This is a White Man’s Government,”
Harper’s Weekly,
September 5, 1868.

白人の統治」をスローガンに人種主義を強調すると、ナストは図版 12「これが白人の統治」を発表し、戦後民主党の三本柱である退役軍人、ウォールストリートの経済エリート、アイルランド系労働者を醜く描き、民主党綱領を否定した²⁰。

対民主党戦術という点では、1869年夏に始まるニューヨークでのタマネー協会、トウィード・リング批判のキャンペーンも同じである。1867年に州議会議員に当選して以降、トウィードは市政の会計監査部門を支配しさらに私腹を肥やす一方、ブロードウエーの道幅拡幅やメトロポリタン美術館の敷地確保などで市民への人気取りを行った。69年以降、ますます市の借金が膨れあがる中、ナ



図版 13 “Two Great Questions,” *Harper's Weekly*, August 19, 1871.



図版 14 “The Tammany Tiger Loose,” *Harper's Weekly*, November 11, 1871.

ストは目に余るトウィードの横暴を告発する風刺画を連載し、アイルランド系移民批判、ローマ・カトリック批判などと連動させつつ闘いを挑んだ。ニューヨーク・タイムズが71年になって会計責任者を告発する記事を書き、トウィード包囲網は徐々に狭まるが、ナストにはトウィード側からヨーロッパ旅行の誘いや10万ドルもの賄賂話が舞い込むなど、懐柔策も試みられていたようだ。HWを発行するハーパー社にも、市教育局から長年、市内の学校で使ってきたハーパー社の教科書の契約打ち切りの宣告が突如あるなど、駆け引きは激しさを増した。ナスト一家は身の危険を感じ、妻子はニュージャージーのモリスタウンへと転居した。トウィードは、「私の支持者は新聞が読めないから記事はいくら書かれてもいいが、ナストの漫画だと理解しちまう」と、ナストには怒り心頭だったとの逸話が残っている。結局、1871年暮れにボス・トウィードは起訴され、73年有罪判決を受け、このキャンペーンはナスト側の完全勝利に終わった²¹。

(4) 再建政治の終焉とカーチスとの対立 (1873～1885)

グラント再選やトウィード・リング批判のキャンペーンにより、ナスト人気はさらに高まり、先述の通り、1873年にはハーパー社は異例の専属契約を結んだ。同年刊行されたイラスト満載の『ナストの暦 *Nast's Illustrated*

Almanac』も売れ行き好調で、画家としては絶頂期を迎えた。しかし、1873年以降、いよいよ再建期の急進的な改革も終焉に向けてカウントダウンが始まり、しかも深刻な経済不況が起こったことで、ナストの風刺画にも変化が起こった。それまでの連邦議会の政界ネタが減り、経済不況を扱ったものやサンタクロース関連作品など、家族向けのネタが増えていくのがこの時期の特徴である。政界ネタが減ったのは、クレディ・モビリエ事件などグラント政権を揺るがす汚職事件が政界を揺るがしていたからである。

1873年の経済パニックを受け、ナストは政府の誤った経済政策の新しいシンボルとして「通貨インフレ」の縫いぐるみを作り批判を展開したが、他紙からはナストの経済政策の誤解、国民経済に関する知識不足が指摘されてしまう。同時代にナストは、善良な労働者を蝕む外来思想として Kommunismus を骸骨として描く絵(図版 15)を数点描いているが、不況下にあっても昔ながらの労資協調の必要性を説く「アメリカの双子」(図版 16)のような保守的な立場を崩すことはなかった。

さらにナストの絵に大きな変化をもたらしたのは、1876年の大統領選と翌年の連邦軍南部撤退による再建政治の終了であった。この年になって初めて、ナストは連邦軍の撤退を批判する風刺画の掲載をカーチスに止められ、自らの描きたい絵を HW の政治編集部都合で描けない状況に追い込まれ



図版 15 “The Emancipation of Labor and the Honest Working People-Communists,” *Harper's Weekly*, February 7, 1874.



図版 16 “Labor and Capital, The American Twins,” *Harper's Weekly*, February 7, 1874.

た。1876年、77年の風刺画には、共和党の変質を政治家に焦点を当てて批判するモノは一点もなく、1876年の大統領選ではナストはヘイズ大統領候補を支持せず、一枚も絵を描いていない。こうした状況にナストが追い込まれた背景には、それまでナストの支援者としてあらゆる雑音からこの画家を守り抜いてきたフレッチャー・ハーパーが77年5月に亡くなったことが関係しており、これによりHW内の力関係が変わり、カーチスの編集権がナストの風刺画にまで及ぶことになったのだ²²。

ナストはその後HWで風刺画を描き続けたが、1880年の大統領選でもカーチスとの対立は続き、党綱領は支持したもののガーフィールドを支持することはなかった。紙幅の都合もあり、今回は最小限の言及に留めるが、唯一、この時期にナストが取り組んだ連邦政府が関わる政治テーマに「中国人問題」がある。このテーマではカーチスがナストにフリーハンドを与えたことで、ナストは排華の急先鋒であった1884年大統領選で共和党有力候補となるブレイン議員を徹底的に批判し、「中国人問題」を通じて、再建政治の終焉の意味、アメリカの自由や民主主義の変質を描いた（図版17）²³。



図版 17
(Dis) "Honors are easy,"
—Now both parties have
something to hang on.
Harper's Weekly, May 20, 1882.

(5) 晩年——引退、エクアドルでの死（1885～1902）

1884年の大統領選では、共和党候補を支持せず、民主党候補のクリーブランドを支持し当選させたものの、ナストはHWで仕事を続けるべきか悩み始めていた。友人のマーク・トウェインらとの交遊や息子との講演旅行の計画で気を紛らわそうとしたが、ナストにとって決定的な打撃となったのは、彼にとっての唯一無二の英雄グラント前大統領が1885年に死去したことだった。喉頭がんで闘病生活を送っていたことをナストは知っていたが、

彼の死を受けナストは「孤独で一人取り残された」と語っている²⁴。学歴エリートではないナストにとって、若い頃から、ガリバルディにせよ、グラントにせよ、愛国の軍人こそが最高の英雄であり、この盟友の死がナストの晩年のくだり坂人生の端緒となっていく。

風刺画を描いた数としては最多となる 189 枚を描いた 1886 年であるが、この年、ナストは長年勤めた HW を突然辞めた。最大の原因は、カーチスの編集下で好きな風刺画を描けない状況が許せなかったからである。ハーパー社からの固定給はそのままだったので、ナストは自分の風刺画を集めたクリスマス読本やトウィード・リング批判の本の出版に向けて仕事を続けた。翌年は全米各地を講演旅行をして回ったが、かつてほどの集客はなく収入も減った。この時期、ナストはコロラドの銀鉱山の投資に手を出し大損するなど、かつての裕福な生活は過去のものとなりつつあった。絵入りジャーナリズムには 80 年代には『パック』などカラー印刷のより魅力的な風刺画新聞が登場し、新聞界には若いハーストやピューリッツァーらが登場しており、ナスト自身、自分の時代が終わりに近づいていることを感じていたはずである。いまいちど、誰からも横槍を入れられずに自由に風刺画を描くため、1892 年には自分自身の風刺画新聞（Gazette Thomas Nast's Weekly）を創刊し再起を試みるが、長続きすることはなかった²⁵。

プレジデント・メーカーの異名をとったナストであったが、1888 年大統領選では再選を支援した民主党候補クリーブランドが落選し、初めて支援した候補の敗北を経験した。次の 1892 年大統領選では、共和党候補ハリソンを支援したものの、今度は民主党クリーブランドが当選し、二度目の落選候補支持となった。この頃、HW も経営難に陥り、ナストもモリスタウンの邸宅を抵当に入れるなど、資金繰りは悪化の一途を辿っていた。天敵カーチスが亡くなった後、1895 年から翌年にかけてナストは HW に一時的に復帰するが、その 2 年で描いた絵はわずか 24 枚であった。

最晩年のナストに、もう一度、夢を与えてくれたのは、やはりナストが長年かけて築き上げた政界人脈、大統領セオドア・ローズヴェルトと国務長官ジョン・ヘイであった。ナストは、ヘイがリンカン大統領の私設秘書をしていた頃からの友人で、海外経験の豊富なヘイは『ニューヨーク・トリビュー

ン』の記者としても活躍した。30年来の友人であるナストに再起を促すべく、ヘイは國務長官として、ローズヴェルト大統領にナストを外交官として登用することを提案すると、大統領はかつてニューヨークの警察長官をしていた頃より、ナストの大ファンであったことから、その提案をすぐさま受入れ、南米エクアドルのグアヤキルの領事職に任命することが決まった。年間4,000ドルの給与ではあったが、ナストにとって願ってもないものだった。ナストは1902年3月に正式に任命され、6月1日にエクアドルへと赴任した。妻サラと離れた単身赴任であったことが往復書簡からもわかるが、12月1日に黄熱病に罹り、6日後の7日にナストは帰らぬ人となった。彼の棺はアメリカに戻され、ニューヨーク、ブロンクスのウッドローン墓地に埋葬された。享年62歳、ドイツから幼くして海を渡り移民してきたナストの風刺画家としての波瀾万丈の人生は、エクアドルにて閉じられることとなった²⁶。

おわりに

以上、「アメリカ風刺画の父」と呼ばれるトマス・ナストのライフヒストリーを駆け足でたどってきた。6歳のときにドイツから移民し、ニューヨークのダウントウンで育ち、南北戦争を機に一躍、風刺画家として脚光を浴び、以後、再建期から1880年代半ばまで、HWでひたすらペンを走らせ続けた。ナストの人生からわかることは、彼が南北戦争という未曾有の内戦とその後の戦後社会が生み出した時代の寵児だったということである。新聞メディアが花開き、アメリカ社会に奴隷解放という革命的な変化が起きた時代に、ナストは共和党に寄り添うかたちであるべき「政治」の姿を民衆に伝え、またそれゆえにナストの絵の変化は政治の変質を映し出してもいた。今回、風刺画の分析は紙幅の都合もあり最小限に留めざるを得ず、稿をあらためて検証する必要があるが、本稿のライフヒストリーを踏まえ、具体的な風刺画の分析をあわせて行うことで、風刺画家としてのナストの意義を問うことがはじめて可能になるであろう。

註

1. 劣等な野蛮な他者を猿顔で描く手法は、進化論発表後のヴィクトリア朝のイギリスの挿絵で始まった。Curtis [1997]。
2. Paine [1980]
3. 林田 [1998]、野村 [2014]
4. 野村 [2014: 28-33]
5. アンダーソン [1997] 第3章。
6. 貴堂 [2006: 27]
7. 貴堂 [2006: 27-28]
8. Paine [1980: 5-10]
9. Paine [1980: 10-29]
10. タマニーホールの歴史については、Allen [1993] を参照。
11. ドイツ系移民の同時期のピークは1854年の20万人。ドイツ系は18世紀から流入者がいたが、1848年組の特徴は、高学歴で知識人層が多かった点である。そこにはカール・シュルツのような革命家で、のちにドイツ系として最初に上院議員に選出され、HWの編集に関わった者もいた。
12. パートン (1822-1891) の作品には、ホレス・グリーリー、アーロン・バー、アンドリュー・ジャクソン、ベンジャミン・フランクリンの伝記などがある。Halloran [2012: 39-42]。
13. ナスト夫婦は5人の子どもを授かった。
14. イタリア取材後、故郷ドイツのランダウを訪れ、親族との再会を果たしている。ナストの創り出す「サンタクロース」は、ドイツのプロテスタント宗教改革の時代に生まれたカトリックの聖ニコラウスに代わる世俗的な存在がモデルになっている。Paine [1980: 30-68]。
15. Paine [1980: 69-105]
16. 詳細は貴堂 [2012: 160-164]。
17. HWに描かれたサンタは色刷りではなかったが、販売用のクリスマスカードや Thomas Nast Christmas Drawings では赤いコートを着ており、このイメージのまま1931年にコココーラの宣伝にサンタが登場し、イメージが定着していった。詳細は http://www.thecoca-colacompany.com/heritage/cokelore_santa.html を参照のこと。
18. Paine [1980: 69, 106]
19. Halloran [2012: 20-21]

20. 「血染めのシャツを振る」戦術の詳細分析は、貴堂 [2006] 参照。

21. Halloran [2012: 119-143]

22. Paine [1980: 319-374]

23. 貴堂 [2012] 第4章参照のこと。

24. Halloran [2012: 265-270]

25. Paine [1980: 520-555]

26. Paine [1980: 557-583]

参考文献

- Allen, Oliver E. *The Tiger: The Rise and Fall of Tammany Hall*. Reading: Addison-Wesley, 1993.
- アンダーソン, ベネディクト 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』 NTT 出版, 1997年。
- Curtis, L. Perry, Jr. *Apes and Angels: The Irishman in Victorian Caricature*. Washington: Smithsonian Institution Press, 1997.
- Halloran, Fiona Deans. *Thomas Nast: The Father of Modern Political Cartoons*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2012.
- 林田遼右 『カリカチュアの世紀』 白水社, 1998年。
- 貴堂嘉之 『アメリカ合衆国と中国人移民——歴史のなかの「移民国家」アメリカ』 名古屋大学出版会, 2012年。
- 「「血染めのシャツ」と人種平等の理念——共和党急進派と戦後ジャーナリズム」 樋口映美, 中條献編 『歴史のなかの「アメリカ」——国民化をめぐる語りと創造』 彩流社, 2006年, 21-42頁。
- 「南北戦争・再建期の記憶とアメリカ・ナショナリズム研究——『ハーバース・ウィークリー』とトマス・ナスト政治諷刺画リスト(3) 1881-1896——」 『千葉大学 人文研究』 通巻31号, 2002年, 509-542頁。
- 「南北戦争・再建期の記憶とアメリカ・ナショナリズム研究——『ハーバース・ウィークリー』とトマス・ナスト政治諷刺画リスト(2) 1871-1880——」 『千葉大学 人文研究』 通巻30号, 2001年, 105-159頁。
- 「南北戦争・再建期の記憶とアメリカ・ナショナリズム研究——『ハーバース・ウィークリー』とトマス・ナスト政治諷刺画リスト(1) 1859-1870——」 『千葉大学 人文研究』 通巻29号, 2000年, 151-186頁。
- 「中国人移民のイメージの相克—トマス・ナストの風刺画の世界—」 日本移民学会編 『移民研究年報』 通巻3号, 1997年, 111-140頁。
- 葛野浩昭 『サンタクロースの大旅行』 岩波新書, 1998年。

Nast, Thomas, St. Hill. *Thomas Nast's Christmas Drawings*. New York: Dover, 1978.

野村正人『諷刺画家グランヴィル——テキストとイメージの19世紀』水声社, 2014年.

Paine, Albert Bigelow. *Thomas Nast: His Period and His Pictures*. New York: Macmillan, 1980 [reprint of the 1904].

Pflueger, Lynda. *Thomas Nast: Political Cartoonist*. Berkeley Heights: Enslow, 2000.

Vinson, John Chalmers. *Thomas Nast: Political Cartoonist*. Athens: University of Georgia Press, 1967.